

自立と共生の教育社会学（その2） —地域民主主義と学校の再生—

神 田 嘉 延

(2007年10月23日 受理)

Educational Sociology for Presonality Independence and Humanity Symbiosis:
Comunty Democracy and Reproduce (PART2)

KANDA Yoshinobu

序章 課題と方法

- (1) 人間発達における自立と共生との関係
- (2) 自立と共生における学校と地域
- (3) 学校の官僚制化と地域からの学校の分離
- (4) 基本的人権としての学習論と民主主義形成のための公教育の原理

鹿児島大学教育学部教育実践センター研究紀要 第17巻（2007年11月）掲載

第1章 自立とコミュニティ

—マッキーバー、テンニース、マルクスから—

- (1) 自立と人間的発達
- (2) マッキーバーのコミュニティ論とパーソナリティーの発達
- (3) テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトからみる人々の結合論
- (4) マルクスの資本主義に先行する諸形態からみる共同体論

本巻掲載

概 要

自立と共生の教育社会学—地域民主主義と学校の再生という全体の構成から、ひとつの分野である自立とコミュニティの関係を本論では論じている。とくに、人間論を社会学的なベースからコミュニティ論に焦点をしづって展開した。この焦点のなかに、近代資本主義社会発展における人間疎外と人間的自立の課題をマッキーバーのコミュニティ論、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト論、マルクスの共同体論から明らかにした。

マッキーバーは資本主義の分業の発展のなかで、人間関係がより複雑になり、人間が仲間と仲間の関係を発達させることの重要性を考えた。それは、社会性と個性の発達と同一の歩調であった。

マッキーバーのコミュニティ論は、前近代的な固定した人間関係や情緒的な関係からではなく、近代化のなかで複雑化している社会関係のなかで人間の共同化の精神を共同生活のなかから求めたものであった。

テンニースは、資本主義の発展の分業によって、ゲ MAIN シャフトからゲゼルシャフトに移行していく論理を明らかにした。ゲゼルシャフト的結合は、互いに独立した存在のなかでの契約による結合であり、内的に一体としての相互作用はないとのテンニースは考えたのである。

ゲ MAIN シャフトな団結体の典型は家族である。ゲゼルシャフト的結合からゲゼルシャフト的団結体の高次の発達が教育によって求められるとしている。それは、個々の目的意志の成果が持続的な活動が保証されたものである。それは、科学的理性によるより高次な選択意志による活動であり、目的結社の性格をもつものである。

マルクスは、近代の資本主義の形成にとっては、共同体から自由になった労働者が必要であったと考える。土地を奪われて自由な労働者になった農村住民は、自発的に自分の労働力を売って生活するようになるまでには、一定の教育の期間が世代的に必要であったのである。土地に縛り付けられた農村住民が収奪されて自由な労働者になるまえに盜賊や浮浪人という無政府的な生活形態を経験するのである。農村にあったゲ MAIN シャフト的共同体の関係は、一挙に無政府性な生活につき落とされたのである。自由な労働者の形成過程などの近代資本主義のそれぞれの国や民族の特殊性を考えていくうえで、資本主義に先行する共同体の諸形態の存在を考えることは重要なことであった。

自立という問題を考えいくうえで、個人のなかに閉じこめて、個人の自立を問題にしていくことは、自立を社会や集団との関係でみないことである。人間は社会的存在であるという人間自身の本質のことからの自立の解明にならない。資本主義による人間疎外を克服していくうえで、人間の社会的存在の認識、教育のもつている重要性を明らかにしたものである。この際に、本論では人間の基礎的な社会的存在としてのコミュニティの大切を確認したものである。

第1章 自立とコミュニティ—マッキーバー、テンニース、マルクスから—

(1) 自立と人間的発達

自立は、個々の学習による人間的発達、さらに、内省し、聖の山で修行したり、座禅して心を磨くなど個人の側面からの精神的修養がある。そして、職人や芸術などの人間の文化専門的技能発達、スポーツなどの身体的技能の能力発達などからみるとおり、個人の側面を重視して自立をみていくことは否定できない。

個々の人間が自立していくには、それぞれの自立の発達の段階がある。それは、年齢的な発達や老化への人間的退化まで自立の段階に即して、人間の諸能力の発達段階が、それぞれの人間発達の要素ごとにあらわれる。人間の諸能力は、数理的論理思考と計算能力の発達、言語的思考と認識の発達、

社会的認識の発達、自然的認識の発達、情操的な発達、身体的発達、技能・技術的発達、コミュニケーション的能力の発達、リーダー的能力の発達など多面的であり、個々によって、その発達も一律に進んでいくものではない。当然ながら人は、得意な領域や不得意な領域があり、個性的な発達を遂げていくのである。

しかし、それらは、人間の社会的存在という面からどのように絡んで、それらの個々の人間的能力が形成されていくのか、また、退化していくのか。それぞれぞれ、人間の社会的存在の本質的な面からみていくことが必要である。つまり、人間個人の発達の側面からだけでは、人間の社会的存在としての自立の側面をみることができないのである。

人間の諸能力の発達は、それぞれの要素ごとの能力の発達を社会的存在としてみることを忘れてはならない。この社会的存在は、固定したものではなく、常に人間社会も発展し、複雑化し、文明と文化を発展させてきた、という視点をもつことが大切である。文明、文化、生産力の発展は、社会を複雑化していった。人間の本質は、社会をもって、集団のなかで生活し、家族をもって生きている。人間は、動物的な生存競争的な個体主義ではなく、目的意識的に社会集団をもって生きて来たのである。人間の起源は、家族を守って生きる氏族・種族共同体社会の形成によってつくりだされた。人間は自然淘汰のなるがままの自然の秩序の動物界から自立したのである。

人間はコミュニケーション手段に言語をもっている。個々の意志は、言語によって伝達し、思考し、文化や文明を継承し、発展させてきた。さらに、絵画や音楽によって、情操を豊かにして、個々の感情を集団や社会のなかで共感し、社会的に結合し、一体性をもって文化を創造し、発展させてきた。そして、自然に働きかけてものをつくり、生存の糧の食糧のために土地を耕し、山に木を植え、自然とつきあい、自然に対する認識と、ものづくりの技量と科学を発展させてきた。これらの人間の発展は、人間の自立の過程でもある。

自立のために人間に成長していくことは、自立を阻害している具体的な状況がある。自立は、人間らしく生きていくために具体的に人間疎外状況を直視していく必要がある。この分析をとおして、自立への展望がひらけていくのである。疎外状況の自己認識から自立課題にむかっていけるのである。本章では、自立への具体的な分析のための基本的な視点をコミュニティ論から明らかにすることを目的としている。

人間的自立を考えいくうえで、自分一人で社会的に生きていくことができるのか。自己認識として、誰の世話になっておらず、自分の力のみで生きていると思っていても、社会的にみれば、それぞれ他の人々の支えによって、生きているのである。自分一人で生きている自己認識ができるのは、自己の働きによって、生活の糧が得られるということで、個人としての経済的自立であり、個人的としての社会的経済役割機能をしていることである。それは、それぞれの社会的な役割機能に、それぞれが責任をもって遂行しているからこそ、個々が自立していると思えるのである。

ところで、障害者や高齢者などの社会的弱者に目をむけよう。経済的効率論では、彼ら、彼女らは、自立できない層にみえる。過疎化していく地域の格差や社会的貧困問題などを考えてみよう。

大都市や中央で権力をもつ層、豊かな層にとっては、自立していない地域にみえる。経済的効率論からみれば大きな経済的発展から桎梏になっているようにみえるかもしれない。

しかし、過疎化していく地域では農林漁業を営み、豊かな環境や人間的な伝統文化をもっており、経済効率論では切れない貴重な人間的価値の側面がある。この人間的価値をもっている地域では、前提として、社会的な援助なくして生きていくことができないという状況を見落としてはならない。

社会的弱者や過疎化していく地域での自立の前提には、社会的援助があり、自立の過程は、人間に生きていくための学習が必要である。自立のための教育の体系のなかで自立の本質をみていく必要がある。人間にとって、自立できない条件がなんであるのか。その条件のなかでいかに人間に生きていくのか。自立の過程における社会的援助、地域的援助のかかわりを考えていくことは不可欠な要素である。これは、単純に阻害条件を克服していくという過程ばかりではなく、人間に生きていく精神的な豊かさの成長であり、その豊かさは、阻害の条件が個別的であることから、具体的で多様性をもった人間的成長が求められているのである。

障害者が一人前に労働できるということが、障害者が一人前に就労できる能力を健常者と同じように能力の養成をすることでは決してない。障害者が自己の能力の特性を十分にいかしながら、喜びをもって仕事ができるかということである。

その障害者の生きる喜びの姿をみて、健常者が自己をみつめながら、職場全体として生き甲斐をもてるようになっていくことである。障害者の社会力は、喜びをもって仕事に生きている姿を健常者に影響を与えていく人間的な生きる力である。障害者自身が健常者の人間的な教師になっていることである。障害者の自立は、障害者自身の健常者並の労働形態をもてるよう、就労のための自立で経済効率的に自立するということを意味するものではない。

高齢者にとって老いは個々にとって多様に出現する。高齢者にとっての多様化した老いのなかで、人間に生きていくということは、喜びをもって生きていることである。人間らしく老いるということはどのようなことか。高齢者は人生の達人である。伝統文化や様々な技能を多様に豊富にもつている。

文化や文明の継承として、高齢者の力を子ども達に伝承することは、高齢者自身の生き甲斐にも繋がっていく。子どもと高齢者の繋がりは、コミュニティの文化継承でもある。老いた高齢者が子どもとのふれあいのなかで、高齢者の輝きが生まれていく。このふれあいの場づくりは、教師や社会教育関係者の援助がなければ実現しない。社会的、地域な援助によって、人間に老いることが豊かになっていくものである。それは、多様化する老いのなかで、個人的な問題だけではないのである。

自立とコミュニティということのテーマをあげたことは、現代の自立できない人々の疎外の現実を直視しながら、そのなかで人間に生きていくとする課題を自立への道として問題を探求していくことが必要であるためである。

そこでは、資本主義的な競争主義とは別に、人間的な共存関係を探ることを目的としている。そ

して、集団のなかに埋没していた個々の人間の姿から、資本主義的な市場競争のもとで、自然の大地上から分離した自由な労働者の連帯課題を人間の個として、自立を集団関係のなかで歴史的な展望のもとで探っていくものである。

コミュニティという概念は、マルクスの指摘する資本主義に先行する地域共同体ではない。資本主義的な市場に対応して、個人が自立していく過程であり、地域社会のなかでの共同の生活をさしている。コミュニティという概念は、地域社会の共同生活から国家の共同生活的側面を含めて、マッキーバーはコミュニティ論で展開している。

本論では、国家も含めてのコミュニティ論はとっていない。あくまでも地域社会に限定しているが、その地域社会も共同生活の機能的な範域によって重層性をもっている。学校でも小学校と高等学校では、その共同性の範域が異なる。医療においても、開業医と総合病院の範域も異なる。生活の共同性は、それぞれの生活分野の共同生活手段の基礎単位によって異なる。

それぞれの生活分野での共同の連帶意識の側面も大切であるが、共同の生活手段や共同の労働、共同の助け合いなどの現実の社会的な行動の側面から共同生活の範域というコミュニティの形成の問題を探していくことが基本である。コミュニティはいまでもなく外来語であるが、日本語として、広辞苑では、「一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体。個人を全面的に吸収する社会集団。家族・村落など」として多義的に使っている。本論でのコミュニティ概念は、この多義性から一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団の意味で使っている。

(2) マッキーバーのコミュニティ論とパーソナリティの発達

社会学者のマッキーバーは、近代の複雑化していく社会のなかで、目的による組織されたアソシエーションの発達をみながらコミュニティ論を強調する。分業の発展は、職業の専門化が起きる。そのなかで、個々人は、孤立していく。しかし、他方で、マッキーバーは、分業の発展による人間能力発展の可能性を重視する。ここには、分業によるパーソナリティの発展の可能性や教育の役割があるとする。彼は、人間の目的意識性から自立を重視し、その社会的基盤として、コミュニティ論を問題にしていく。

マッキーバーは、コミュニティの範囲を次のようにのべる。「村とか町、あるいは地方や国とかもっと広い範囲の共同生活のいずれかの領域を指すのに用いよう……人間が共に生活するところには常に、ある種のある程度の独自な共通の諸特徴—風習、伝統、言葉使い、そのほか—が発達する。これらは、有効な共同生活の標識であり、また結果である。あるコミュニティがより広いコミュニティの一部となったり、すべてのコミュニティが程度の問題であるということであろう」⁽¹⁾

マッキーバーは、社会諸関係の無限の系列のなかに、広い、非統合的な共同生活から極小で集約的な共同生活まで、国家、地方、都市・市民、民族、部族といった領域のなかでの言語、風習、伝統、文化などの共同生活の指標をコミュニティとみる。コミュニティの概念を共同生活の指標で重層的にみている。したがって、コミュニティの概念をつかって、実証的に社会や地域を分析してい

く場合に、どの領域での、どの指標での共同生活であるのかということが重要になってくる。この問題をあいまいにして、マッキーバーのコミュニティ論の実証的研究の応用は、難しくなるのである。

コミュニティに対比して、アソシエーションの概念を提示するのもマッキーバーの特徴である。アソシエーションは共同の利益の共同の関心であり、目的によって機能的に組織される社会的な機能組織である。マッキーバーは、アソシエーションを次のようにみる。

「社会的存在がある共同の関心[利害]諸関心を追求するための組織体（あるいは＜組織される＞社会的存在の一団）である。それは、共同目的にもとづいてつくられる確定した社会的統一体である。人々が求めるどの目的も、それに関心をもつものがすべてそれを求めて結合し、それを得ようとして皆が協働するときに、誰にも最も達成されやすいものとなる。それゆえに、社会的存在がもつどの可能な関心にも、すべて対応するアソシエーションがあるといってよいであろう」。⁽²⁾

アソシエーションは、共同の関心、共同の追求の社会組織であり、それは、部分的である。アソシエーションは、社会的分業が進むなかで、社会が複雑化すればするほど、様々な目的別の機能的な社会的組織がつくられていく。社会的分業によって、複雑化した社会のなかでの目的別の共同の関心や共同の利害関係は、別のアソシエーションからみれば敵対的な利害関係をもつ場合がある。

社会的分業関係は、機能的に社会の歯車に個々がなっていくのではなく、そのなかに相対立する関係が発展していくのである。資本と賃労働、都市と農村の格差問題、富の蓄積と貧困、南と北の格差問題、開発と環境破壊問題、支配と被支配の関係、帝国主義と植民地、戦争と平和など。それぞれに社会的にアソシエーションがつくられていく。この利害対立が調整されることによって、社会的統合や社会的な連帯も発展していくのである。アソシエーションとコミュニティの関係は、社会的矛盾の拡大のなかでの社会的連帯の形成ということからも重要なのである。この社会的連帯は、人類、国家、地域にとっての長期的な持続可能性という視点からの理性的アソシエーションの高度化が求められている。

マッキーバーは、アソシエーションをコミュニティの中に包みこんでいく。コミュニティのなかには、幾多のアソシエーションが存在する。アソシエーションは、共同の利益と目的によってつくられた統合であり、目的がなくなっていくならば消滅していくものである。コミュニティは、自己の内部にあり、自由に相互に関係しあう自己のために織りなす社会的統一体である。この社会的統一体は、アソシエーションのように、目的がなくなればきていく存在ではない。

ところで、国家は、コミュニティと等価ではなく、コミュニティ内の権威あるアソシエーションであるとマッキーバーは次のように定義する。

「コミュニティは、本来的に自らの内部から発して（自己のつくる法則の規定する諸条件のもとに）活発かつ自発的で自由に相互に関係し合い、社会的統一体の複雑な網を自己のために織りなすところの人間存在の共同生活のことである。ところが、国家は社会生活の一般的な外的諸条件を規定し、外部的に履行される社会的諸義務の主要な体系を支持する必然的形式な用具として機能する

にすぎない・・・國家がコミュニティと等価ではなく、政治的アソシエーションは人間の全生活を包含しないし統制も出来ないということである。国家はコミュニティではなく、コミュニティ内の特に権威あるアソシエーションと考えられる。国家は社会生活の確定された封鎖的な組織である。コミュニティは、いかなる国家の確定した枠組みを超えて拡がり、その枠組みのなかで部分的に統制を受ける不確定的な絶えず進化する体系である」。⁽³⁾

マッキーバーのコミュニティ論では、国家の範域までも含み、国家とコミュニティは大きな関心の領域である。コミュニティは、自発的に相互に共同生活によって社会的統一体をつくるのであり、国家は、人間の全生活を包含できないし、統制することができないとマッキーバーは考える。

国家は、国家機構や法律によって、国民に強制手段をもって統制することができるが、国民の自発性をもっての精神の内面までも自由に統制することができないのである。国民は暴君に対して、精神的に様々な方法で抵抗をしてきたのが人類の歴史であった。たとえば、日本の近世社会での宗教的な弾圧での薩摩の隠れ念佛や隠れキリスト教などはそのよい例である。表面上は、藩の公認の檀家組織に入つて藩の体制の信仰組織のなかで活動をするが、山中や目立たぬ場などの隠れた世界では、隠れ念佛や隠れキリスト教の活動が行われていたのである。みつかれば拷問にあい、ときには、村人すべてが殺される。隠れ念佛の村人がみつかり、廃村になるという悲劇は薩摩にはあった。そのことを覚悟して、隠れ念佛は行われたのである。

マッキーバーは、国家は政治的アソシエーションとしてとらえ、コミュニティのように全体を込み込んでいく組織ではないととらえている。隠れ念佛や隠れキリスト教にみると人間の精神までは、どんなに強力な為政者であっても支配することができないということは真理である。

マッキーバーは、国家を政治的なアソシエーションとしてとらえる。その一方で、社会生活の確定された封鎖的な組織として、政治的な目的によって、柔軟に生きた開放的なアソシエーションとしてはとらえていない。国家は、目的による機能的な社会組織としてとらえる。国家それ自体は、政治的な範域さえも機能的に編成され、権力構造としてみていい機能主義的な国家論をマッキーバーはとっている。

マッキーバーにとって、コミュニティは、社会的存在の相互依存の目的による精神的な魂としての側面を強調しているのも特徴である。「コミュニティは、社会的存在の共同目的と相互依存の目的に依存しているということから、単一の分解しえない心ではなく、複数の心の連合体である」。⁽⁴⁾

マッキーバーにとって、コミュニティの概念は、歴史的な実態的なものからの抽象化されたものではなく、理念上のものからとらえるのが特徴である。「さまざまな歴史諸段階において示されるようなものではなく、理念上のコミュニティであり、・・・法則が明らかとなるのは歴史においてであるが、コミュニティの理念によって導かれているからこそ、われわれは歴史の盛衰と矛盾の巨大なうねりの中で何を探求すればよいかを知るのである」。⁽⁵⁾

マッキーバーにとってのコミュニティ論は、論理的に人間生活の理念論から導かれたものであり、歴史的実態のなかからの矛盾のうねりのなかから分析した結果として、抽象化されたものでないこ

とを本人自身ものべている。理念と歴史的実態をわけて概念を整理して、論理の展開をしているのである。マッキーバーの論理をみていくうえで、理念論的展開としての側面と、歴史的な論理の側面があるのである。

マッキーバーのコミュニティ論は、共同の生活ということが重要な社会的基盤になっている。社会的諸制度や慣習の発達も生活の機能との関係でみるのである。

「コミュニティの諸制度や慣習は、生活に一層役立つ時、さらに発達したことになり、コミュニティは、より大きくさらによりすぐれた共同生活である時に、一層発達したことになる。・・・コミュニティの発達は生活の発達の局面であり、諸制度の発達はそれら制度が一層完全に生活に役立つものに変化することを意味する」。⁽⁶⁾

コミュニティの諸制度や慣習の発達は、共同生活の発達の局面であるととらえる。また、社会制度の発達は、生活に一層に役にたっていることによって、立証されるとしている。コミュニティの諸制度や慣習の機能が効果を発揮しているかどうかは、生活に役にたっているのかということである。

ところで、コミュニティをとらえていくうえでも、自己決定できる人間のパーソナリティの発達は、社会性と個性ということが重要であるとマッキーバーは考える。

「人間がより個性化するという場合には、より自律的存在に、すなわち彼自身には固有の価値や真価が有るものとして、承認し承認される、自己指導的で、自己決定的な、一段と独自なパーソナリティになることを意味する。さらに、われわれが社会化というときには、人間が社会に一層深く根を張る過程、つまり人間の社会的関係がより複雑でかつ広範囲になる過程、人間が仲間との関係を増大させ、発達させることにおいて、またそのことを通じて彼の生活の実現を見出す過程を意味している。したがって、われわれは法則を次のように表現することが出来る。すなわり、社会性と個性は、社会化と個性化の過程に対応する特質をもつてゐるので、<社会性と個性は同步調で発達するものである>」。⁽⁷⁾

個性はその人の特徴ある人間らしさであり、画一的な錫型にはまった人間像を意味するものではない。近代以降の基本的人権の確立は、多くの人々に人間的個性の発達の可能性を教育によつてもたせた。それは、文化をもつた人間の自由性と創造性を個々の人格に合わせた概念にも繋がっていく。マッキーバーは、個性と人間のもつてゐる社会性との関係でパーソナリティの発達をみている。

近代資本主義の発展は、分業をつくりだし、科学を推進させて、複雑で多様な社会をつくりだしていく。このなかで、人間の感性も理性も個別化していくが、個性がより開花していくのは、社会性のなかである。人間の個性的特徴は、社会のなかでこそ、その真価が発揮される。個性の発見や技量などで自己の習練過程は否定できないが、その自己の習練も社会性をもつて個性が磨かれていく側面がある。

マッキーバーのコミュニティ論は、人間社会関係がより複雑になる関係で人間が仲間と仲間の関係を発達させるなかでの社会性と個性の発達と同一の歩調をとるものである。コミュニティの概念

は、前近代的な固定した関係からではなく、近代化のなかで複雑化している社会関係のなかで人間の共同化の精神を共同生活のなかから求めた。それは、より社会化された人間の関係である。人間の天性は、生活の共同化であり、生活の共同からの連帶心であり、特定のアソシエーションの目的に共同生活を一致させることではないとする。

「完全に社会化されていることは、人間の天性を、単に特定のアソシエーションやコミュニティの目的に完全に一致させることではなく、個人が応じる最も広大なコミュニティの目的に、つまり人間のあらゆる潜在能力を發揮するに足るだけの深みと、拡がりのある目的に、完全に一致させることを意味するのである。社会化は、いずれも所与の社会類型への適応を意味するものではない。・・・彼の社会化が深くなればなるほど、個人が属する<潜在的>コミュニティもそれに応じて広がるところを、われわれは論議を進めるなかで理解するであろう」。⁽⁸⁾

コミュニティ論は、特定の目的や社会的類型に対応するものではない。社会が複雑化すればするほど、人々は孤立化し、分業社会に対応して官僚化していく。マッキーバーにとって、近代社会において、目的による機能組織や団体からの統合では、人間的連帯は生まれてことないとする。人間の天性から共同生活の連帯から個性と社会化が統合したなかで、コミュニティの形成がされると強調しているのである。組織的に自己決定できないのは、個性のない「コミュニティ」であり、近代化していない共同体や官僚化した組織のなかで生きていることを意味している。個性と社会化は、近代社会における人間的な自我の形成であり、人間的なパーソナリティの発達にもなるのである。マッキーバーにとって、近代社会の理念的な人間像は、個性と社会性の発達したものであり、自己決定できる人間的能力の発達であると次のように述べる。

「あらゆる人間の性格ないし自我は、個性と社会性によって織り成されたパーソナリティである。われわれが個性という場合、社会環境と同様に、パーソナリティの成長にも不可欠な、自己決定と自己表現の資質や能力のことを意味している。・・・個性と社会性は、原始生活にみられる集団的に統制された無味乾燥な画一性から、われわれの文明に属するごく普通の成員さえもが有する、より豊かでより自律的な性質に、現れてきたのである。したがって、個性と社会性が、人間の具体的なパーソナリティにおいて、どれだけ絶えず成長を示してきたかを理解することは、コミュニティ発達の全過程を理解するための鍵となる」。⁽⁹⁾

マッキーバーにとって、コミュニティの発達の鍵は、個性と社会性の発達である。近代的なコミュニティは、パーソナリティの成長が不可欠であり、原始生活にみられる集団的に統制された画一的な文明を意味していないということである。

近代化されたなかで個々が孤立していくことは、それぞれの社会化されたなかでの個人的な能力の問題であり、コミュニティの協同の活動の発達も、コミュニティの構成委員の個性と社会性の能力発達に関係している。コミュニティの形成に教育の役割が決定的な条件になっているのである。マッキーバーのコミュニティ論からのパーソナリティの発達による個性と社会性の統合は、教育の役割なくしてコミュニティの発達はないのである。個人は社会生活に根をおろしてよりよい生活を

するのは、個々の発達能力に即応するとマッキーバーは次のように指摘する。

「個人が社会生活に根をおろして依存する程度は、それぞれの発達能力に相応するものであることがわかる。そうした能力が大きければ大きいほど、組織的で協働的なコミュニティがその成員に対して与える利益も、彼らが成熟していくにつれて、ますます大となる。発達のための能力が大きければ大きいほど、発達する成員はそれだけ社会の助けを<必要>とする。そうした能力は、もはや個人が根深く、狭隘で、安全な本能の常道に従って行動し得ないことを意味する。したがって幼児のより大きな無力さと不安定さを意味し、また学習のためのより大きな才能だけではなく、より大きな学習の必要性を、さらに社会を通じてのより大きな達成だけではなく、社会へのより大きな依存を意味している」^⑩

個人が共同生活としてコミュニティに根をおろしていく程度は、個々の発達能力に相応するものであり、教育の結果である。個人が能力的に大きくなればなるほど組織的な協働的コミュニティに根を深くおろしていくのである。つまり、社会的な助けを必要とする能力をもっていくのである。発達すればするほど、社会の助けを必要と思うのである。社会の助けを必要とすることは、協働で生きていくということがより人間の発達であるということを意味している。

人間は諸能力を発達させ、理性的になればなるほど、社会的な助けという協働の関係を深めていくのである。人間に社会のなかで自立していくということは、協働的関係を個性と社会性というパーソナリティの発達によってなしつげられていくということがマッキーバーの論理である。人間的自立発達は、個性をもつての社会的協働的関係の発達である。個性の発達は、社会的な協働関係のなかで自己決定できる能力である。

人間に個性の発達は、コミュニティのなかで最も利益を得ていく。コミュニティがより組織されていれば、個性の要求ばかりではなく、個々の可塑性と発達可能性が豊かになっていく。コミュニティ内にアソシエーションが個性との関係で発展し、役割分担がアソシエーションの充実によって個々の能力が発揮され、そのことが、全体としてのコミュニティのなかで結合されて、組織化されることによって、個性はより完全になっていくのである。

つまり、個性は、アソシエーションのみの機能組織のなかでは十分に役割を果たすことができない。役割分担が意識されていくことは、コミュニティという全体のなかでの位置づけと調整が必要になっている。マッキーバーは、コミュニティのなかでこそ、最も個性が発揮されていくことを次のように述べている。

「人類はあらゆる存在のうち生誕時に最も無力な存在であり、そしてあらゆる存在中、最も可塑性と発達可能性に富み、蓄積されたコミュニティの経験によって最も利益を得ることのできる生物である。コミュニティがよりよく組織されているほど、成人の個性の要求のみならず、その潜在的成員の要求にも、それはますます役立つことになる。コミュニティが著しく組織され、家族のみではなく、コミュニティ内のすべてのアソシエーションが既に形成された個性の発揮に対してだけではなく、新しい個性の形成についても、十分それぞれの分担を果たす時に、社会化は完全であり、個性

化はその成員の最高限度の能力にまで進展したといつてもさしつかえない」。^⑪

コミュニティは固定しているものではなく、社会的発展によって、分化していくものである。分化は、社会的関係がより複雑になり、アソシエーションが内部に発展し、社会的個人におけるパーソナリティの成長によって進んでいく。これは、近代社会の個性の発展ということから必然性をもっている。コミュニティの分化は、全体の相互依存のなかで結びついていく過程であり、社会性と個性ということからのパーソナリティの成長によって、決定されていく。

マッキーバーが描くコミュニティ論は、アソシエーションの発達した複雑な社会関係でのパーソナリティの成長を基盤にしての共同の生活形態である。コミュニティの分化も大きな課題になっている。従って、マッキーバーは、近代以前の共通の血縁、共通の信仰という共同体的なコミュニティを理念的に求めるものではなかった。

原始的コミュニティから近代的な社会諸関係の発展によって、コミュニティの発達が起きていくのである。近代以前の信仰や情緒的地域感情からの閉鎖的な、外部に対する統合意志ではないとする。それは、完全な合意ではなく、利害をもつ多様なアソシエーションと人間性の多面性の認識の限界を伴っている共同生活の形態である。

コミュニティは、より近代的な個性と社会性というパーソナリティの発達からの協働性という能力の発達によっての共同生活での統一体である。強固な共同体のなかで、個性やアソシエーションの発達が内部にない状況では、コミュニティの形をなしていないのである。血縁や信仰、地縁による共同の生活の形態は、みせかけの「コミュニティ」であり、マッキーバーが描くコミュニティではないのである。

コミュニティは近代社会の個性の発達、慣習法から成文法の成立、家族の要求と国家の要求、つまり、世襲制や家族的権威、闇などが一掃されていく近代の個性と社会性の発達に人々が教育の結果として、認識し、協働の組織化をしていくなかでつくられていくものである。

原始コミュニティと近代的な本来のコミュニティの形成の歴史段階をマッキーバーは次のように述べている。

「当初、コミュニティは、形をなしていなかった。家族は国家であり、国家は家族であった。また教会は国家であり、国家は教会であった。孤立した原始のコミュニティは、原理上の区別もアソシエーションの分離もなく、いまだ社会生活の形態になっていないあらゆる要素を、不完全に結合させていた。コミュニティの見せかけの基盤は共通の血縁や共通の信仰であったかもしれないが、しかし眞の基盤は生活のあらゆる関係にまで及んでいる同質的伝統である。なぜならば血縁それ自体はいまだ限界の設定された原理ではなく、信仰もやはりそうではないからである」。^⑫

原始のコミュニティは、家族と国家、教会と国家が一体であり、アソシエーションの分離もなく、社会的生活形態は、不完全に結合されていたとマッキーバーは考える。近代的コミュニティにとってアソシエーションの社会的組織が分離して、内包していることが前提になっているのである。共通の血縁や共通の信仰による統合は、みせかけの「コミュニティ」というのである。つまり、地縁

や血縁の伝統的な社会組織は、マッキーバーにとっては、本来のコミュニティではないとする。

「共同生活の潮流が、もやはコミュニティの成員の完全な合意にもとづいて、動くことはない」という事実認識である。社会諸関係の厳格で不可欠な区別が顕わになるので、慣習から法が出現する。家族の要求が国家の要求と区別されるようになったので、家長と立法者が同一であることをやめる。以前はただひとつの忠誠しかなかったと思われるところに、多くの忠誠が、おののそれ自体の限界を伴って現れる。」⁽¹³⁾

國家の忠誠が家長と立法者が同一の絶対主義国家の場合は、ひとつの忠誠であったが、多元化している民主主義の国家では、忠誠の対象が多くのものになっていく。それぞれの法の要求の社会的基盤は、多様な層からの要求として、社会的な秩序から統一されていく。コミュニティには、目的の異なるアソシエーションが存在し、政治的アソシエーションがそれぞれにつくられていく。

国家はマッキーバーがのべるように政治的なアソシエーションとして、司法、立法、行政の三権や行政施策と、軍事、治安、税・財政、福祉、教育、法、金融など様々な機能的側面は否定できないが、国家を構成するすべての国民に対して社会的制度としての強制力をもつてることを見逃してはならない。国民は国家の強制力から逃れることはできないのである。しかし、統一体は国家ではなく、コミュニティの個性の協働と共同生活性からということでの結合である。近代化していく複雑社会のなかでの共同の生活や協働の関係は、それぞれの課題ごとに重層的である。

ところで、身近なコミュニティから様々なレベルのコミュニティの範域がある。そして、身近なコミュニティは共同生活において重要な位置にあるが、排他性や感情面の強固さ、情緒的な一体性、己の情におぼれるという個性という側面からみるならば、警戒しなければならない大きなマイナス傾向がでやすい側面をもっていることをマッキーバーは次のようにのべる。

「われわれの生活は、一つのコミュニティではなく、われわれを重層的にとり囲んでいる多くのコミュニティ内で実現されている。身近なコミュニティには、親密な忠誠と、人格的な関係、日常生活の具体的伝統および記憶がつきまとるものである。しかし、身近なコミュニティだけがすべてのところでは、無知と狭量な考え方にもとづく排他性が存在し、その感情面での強固さは、知性の弱さと表裏一体をさしているものである。このような場合、その成員は、伝統の奴隸になり、己の情に溺れてしまう。門戸を開かねば、いや、壁を打ち破らなければそこには進歩はない。ここにこそ、より広大なコミュニティの果たすべきサービスがある。つまり、「文明化」をより完全になすだけではなく、より広範な文化を解放することである。」⁽¹⁴⁾

日常生活での小さなコミュニティではなく、大コミュニティは、唯我独尊主義や画一性の強制を打ち崩すものである。小さなコミュニティが人格的な関係で結びつく暖かい感情や身近な情愛ということで結びつけられるが、それは、現実の感動的な力や親密的な統一が犠牲にされることがある。そこでは、無知と狭量な考え方にもとづく排他性が存在し、その感情面での強固さをつくりあげ、伝統の奴隸になり、己の情に溺れるようになる。マッキーバーは身近な小さなコミュニティのマイナス面を強調している。また、大コミュニティは、人々を結びつける関係が部分的となり、非人格

的、疎遠なものになる。マッキーバーにとって、大コミュニティの意義は次のようになる。

「現代の世界は、幾重にも拡がるコミュニティという形態をとることになる。すなわち、村落や教区、町区から始まって、われわれが知性・叡智を以て識別し統合し得る幾多の共同関心をもつ巨大な連邦地域の範囲にまで拡大するコミュニティとなるのである。なぜなら、連邦という観念で明示される究極的法則とは次のとくであるからである。すなわち、共同関心が拡大している限り、それと同じ範囲までコミュニティも当然拡大していくことである。広狭両面の要求にしかるべき対応出来るのは、孤立や併合ではなく、また郷党主義や世界主義でもなく、まさに幾重もの拡がりをもつコミュニティ圏なのである。」⁽¹⁵⁾

マッキーバーは幾重にもなるコミュニティの存在の意義を大切にしている。小コミュニティから拡大するコミュニティによって、知性や叡智の側面から統合する側面が大きくなっていく。この拡大するコミュニティのなかで、現代的に大きな問題としてマスコミからの情報の吸収がある。マスコミュニケーションの発達によって、大衆操作できる社会的手段も増していくことも無視できない。

さらに、分業化と競争によって、個々が孤立化して、疎外的状況の側面も見逃してはならない。人々は群衆化して、知性や叡智ではなく、大衆的情緒主義や群衆的心理主義によって、みせかけの結合による行動に走ることがある。マッキーバーの指摘するように拡大していく大コミュニティが知性や叡智の発達としてのみ働くとはかぎらない。

拡大していくコミュニティで幾重にも重層的につくられていくコミュニティで個性と社会性、協働の関係がつくれていくのは、教育である。その教育自身が個性と社会性をもって実践されいくことが必要条件になる。

知性や叡智の可能性を実現していくのは、身近な生活のなかで実感できる教育成果の力が不可欠なのである。身近な生活の集団のなかで、協働を伴っての知性と叡智をもった人間的自立の達成過程のなかでこそ、近代社会における本来の連帯意識や共感していくコミュニティ形成がされていくのである。

マッキーバーは、経済との関係でコミュニティを考えていく場合に、競争という対立関係と共同関心という協調的類似関係を見出していく。競争社会では、個人や集団の成功は他の個人や集団の成功の妨げになる。コミュニティは、このなかでは成立しない。競争的対立関心を超えたところにコミュニティがある。

対立を超えるところの町や田舎、階級や党派、包括的な国家、教会などより広範な共同関心が拡がっていくとマッキーバーは考える。ある特定の関心についての対立は、すべての関心ではない。競争での対立は、共同関心からくるコミュニティを認めることによって、部分的で限定的になる。競争が限定されることをマッキーバーは次のようにのべる。

「ある程度の共同関心を自覚するなら、競争は加減される。たとえば、競争する商人が自らの職業上の地位の上昇を求めて協力するとき、販売価格などについてある協定を結ぼうとするとき、製造業者からももっと有利な条件を確保しようとして団結するとき、競争は手加減される。事実上、

すべての競争が今日こうして限定されている」。⁽¹⁶⁾

商人同士の競争は、商人としての共同の利益を得ようと製造業者から有利な条件を確保しようとするとき、競争は限定されるとしている。つまり、共同の利益を得ようと、それぞれが協力して、協働の仕事をするときに競争が限定されていくことである。また、知性の発達は、共同の関心を追求するようになり、社会との関係で協働の仕事をしていくのである。知性は、競争による孤立化から社会的な協働の仕事をつくりだしていく。マッキーバーは、知性と共同の関心との関係で次のように述べる。

「コミュニティの発達は、ただ共同関心の形成過程だけではなく、その変容の過程でもある。知性の発達にともない、人間はますます共同関心を追求するが、その追求の仕方は変化する。ここで再び、経済と社会の関係が明らかとなる。けれど、共同関心は人間の知性の発達にともなって変化するが、同時に、社会化と経済の高度の発達を意味するからである」。⁽¹⁷⁾

この場合の知性は、教養的な知性であり、競争のための目的を達成するための知性ではない。知性は自然の恵みを利用して、アソシエーションの成功に都合のよい環境条件を引き出し、自己の目的にかなうような秩序をつくりだす。アソシエーションの成功は、共同関心に結ばれた人々のコミュニケーションの発達であり、コミュニティの一層の発達がつくれていくと、マッキーバーは考える。

分業の発達は、共同生活の破壊ではなく、共同関心の分化でもなく、人間労働を機械的に単調にするものではないということがマッキーバーの見方である。専門化は、労働者が仕事に熱心になり、満足感が増大していくものであるとする。専門が発達すると、人間は肉体労働から解放されて知性が発達する。専門労働は、専門能力ばかりではなく、一般的能力を要求していくとマッキーバーはみる。

「分業が本来、社会の経済形態と社会化の要因の両者を合わせもち、また同時に、パーソナリティの発達とコミュニティの連帶にやくだっている」。⁽¹⁸⁾

マッキーバーは、分業の発展は、デュルケムの展開した分業論のように、人間の精神的孤立化を招くのではなく、パーソナリティの発達とコミュニティの連帶に貢献していくことをみているのである。デュルケムの分業論に伴う自殺論、それを克服していく市民道徳論については、次章の「資本主義的孤立と人間的自立問題」のなかで展開するのでここでの展開は割愛する。

マッキーバーは、分業によって、専門的な能力ばかりではなく、一般的な教養能力も発展して、自己決定できる人間的知性が発展していくということをみたのである。分業の発展を社会の発展から、マイナス面としてとらえず、人間的な能力の発展の可能性として考えたのである。分業によっての労働のとらえ方はコミュニティによって、自己の労働に喜びをもつようになるとしたのである。

マッキーバーにとってコミュニティの存在が協働的意志を作りだすとする。そして、個々が責任感を感じる喜びをもつようになるとしている。コミュニティと経済は、協働の活動という意志によって、共に発展していくというのがマッキーバーの見方である。このことについて、マッキーバー

は次のように述べている。

「人間が自己の労働に喜びを感じ、労働のなかに、また労働を通して、人間の本質を表現し、発見できるように労働条件を変えられる場合には、いつもコミュニティと経済は、共に発展する。・・・責任感ほどこうした労働の喜びを実現する上で、力になるものはないし、また協働ほど責任感を生み出すものはない。人は共同関心に専心すればするほど、このなかに、自己を実現するものである。このことは、また経済についてもいえる。共同関心の追求は、目的の達成に劣らず価値があるからである」。⁽¹⁹⁾

マッキーバーは、コミュニティの存在ということで、分業化された複雑な社会において、より人間は豊かに精神的な充実を達成することができるとしている。社会的な分業の発展ということと、コミュニティの発展がストレートに対応していくものであるのか。この疑問は、分業化による専門性の発展、部分人間化ということで、大きな媒介類が必要なのである。分業の発展とコミュニティの発展ということは、パーソナリティの発展ということから人間の協働のための能力の発展が不可欠なのである。

コミュニティの発展は、目的意識性により人間個々の組織化が必要である。その組織化の可能性は、分業の発展により知性も高まっていく条件がつくられていく。分業は専門的能力も必然的に要求していくが、他方で単純労働も同時につくりだされいく。分業は精神的労働と肉体労働の分離をつくりだす。分業の発展によって、専門的な多様化が進み、個々が社会的歯車になって、精神的孤立化が進んでいくのである。

また、資本主義的な分業の発展は、所有、経営、労働という分離が行われ、専門的な労働も経営や所有と一体的におこなわれることはない。資本主義的分業の発展は、それらの大きな矛盾をつくりだし、その克服は、労働過程や経済の過程において、必然的につくりだされるものではなく、社会的に、その矛盾を意識された人々によって認識されていくものである。

一般的な教養ということは、分業による労働の必然性からではなく、分業により自由な時間の増大の可能性と専門的能力の形成の必然性による知的活動の参加機会の増大ということで、独自に一般的教養を高める目的意識性がなければ形成されないとすることをマッキーバーはみていない。この意味で分業の発展とコミュニティの形成を楽観的にみているのがマッキーバーの大きな弱点である。

しかし、コミュニティの形成によって、労働をとおして人間の本質を表現し、発見できるという指摘は、資本主義的な分業の発展による人間的な疎外の矛盾をコミュニティの役割から問題を解いていくということで、パーソナリティの発展や教育の役割を明らかにしたことで大きな貢献である。

(3) テンニースのゲメインシャフトとゲゼルシャフトからみる人々の結合論

テンニースは、人々の社会的結合をゲメインシャフトとゲゼルシャフトにわける。マッキーバーのコミュニティ論は、近代以降の共同生活を基盤にしての社会的連帯を求めたのに対して、コミュニ

ティを人間の本質と近代社会以降の機能的な社会組織と2つにわけたのである。この意味で人類史的視点からのアプローチから理念的な高次の社会的連帯をもつ社会的結合体論理を構築している。2つの類型は、人々の結合を血縁や地縁、一体性、習慣、宗教などの本質意志によっているゲゼルシャフトと、利己心の追求による協約、人間の打算によって設定される政治、人間の意識性によって設定されるゲマインシャフトということで、社会的組織を人間の意志の形態で2つに大別している。

テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトの見方は、人間の自立発展とコミュニティを社会的結合と人間の意志から考えていくうえで、大いに参考になる。マッキーパーは、コミュニティを考えていくうえで、個性と社会性ということからの人間の意志による共同生活を様々な側面から重視したが、テンニースにとっての持続的な真実の共同生活はゲマインシャフトであった。

「ゲマインシャフトは持続的な真実の共同生活であり、ゲゼルシャフトは一時的な外見上の共同生活にすぎない」。²⁰⁾

ゲマインシャフトは、人間にとっての本質意志であり、自然的な状態であるとテンニースは考える。テンニースにとって、血縁的社会組織を重視したのは、人間の本質的な連帯がどこに基盤をもって形成されていくかという問題意識であった。かれにとって、人類史的に共通する社会的連帯の基盤を探ろうとしたのである。この人間の本質的な意志から人間諸個人の意志の関係をとらえようとしたのである。

「ゲマインシャフトは、本来的にあるいは自然状態としての人々の意志の完全な統一から始まる。この自然状態は、経験的には分離しているにもかかわらず、その分離を通して、さまざまに制約されている諸個人間の関係に必然的な所与の性質に応じて、いろいろな形をとって保全される」。²¹⁾

親子関係や兄弟関係などの血縁的なつながりや夫婦関係などの原初的諸関係の共同生活をゲマインシャフトの萌芽形態とし、家族精神をゲマインシャフト的意志のなかでテンニースは重視する。ゲマインシャフトをみていくうえで、親子関係、夫婦関係、兄弟関係の家族精神が人間の本質、自然状態であるとしたのである。人間らしさの基盤を家族としての血縁的関係に求めたのである。この意味で、もっとも血縁関係が単純な形で現れている原始的な種族・氏族共同体社会からゲマインシャフトの論理を出発させたのがテンニースの特徴である。

ところで、ゲマインシャフト的意志は、相互に共通的な結合的な心もっている。この共通の結合の心をテンニースは、了解の概念として重視している。それは、人間を一つの全体の部分として結合する特殊な社会的な力とする。人間の内部にある一切の衝動的なるものは理性と結びついているとする。それは、言語の能力を前提にしている。言語能力は、人間の個々の意志を結びつける前提と考える。親と子の理性的意志が付与されている限りにおいて、了解は存在するとテンニースは理解する。そして、了解の重要性を次のように指摘する。

「了解は、お互いについてのくわしい知識にもとづいている。この知識が、他人の生活への直接的関与と、共に喜び共に悲しむ傾向とによって規定されると同時に、他方ではそのような直接的な

関与と傾向を促進するものであるかぎりにおいて。したがって相互了解は、体質や経験の類似が大きくなればなるほど、あるいは、気質や性質や考え方が同一のまたは調和した種類のものであればあるだけ、それだけそう行われやすい。了解の本質を形成し発展せしめる器官は言語そのものである」。²²⁾

血縁者や夫婦は、互いに愛し合い、互いに慣れ親しみやすく、しばしばお互いに相互について語り共に考えあう。互いに慣れ親しみやすい関係においても雰囲気のみによって、人間的了解が常にされるものではなく、変化し、生活が複雑化している現代社会は、言葉を交わしながらの慣れ親しみが深まっていくのである。

ことばによる了解は、ことばのみの了解ということではなく、ことばのなかにある経験の同質性や気質や考えの同一性が了解を容易にしやすくなる。同質的な変化のない社会においては、経験や考えの共有性は得やすいが、個々の生活が異なり、みえにくい現代社会は、ことばの了解は、共有していくうえで重要になっていく。肌と肌との触れあいというスキンシップは愛情を表現するうえでも重要なことであるが、その人間的了解においてもことばの役割を無視できないのである。ことばの意味が十分に理解できなくとも、言葉を交わしながらお互いの気持ちが理解しあえるのである。ことばをかわしながらの気持ちの動作、体全体で表現して意志を伝達することも広い意味でのことばによるコミュニケーションである。ことばによる了解は、流ちょうで、論理的な言語表現だけではない。人間の感情の表現は、流ちょう性と論理性では通じないのである。

愛し合っている者たちの間には、感情を基礎にしての体質や体験、気質や考えをおしての広い意味での言葉を媒介にして、了解が存在するところに人間的な結合がある。そして、人間的結合は、行動や居住を共にし、共同生活を組織する。この形態をテンニースは、一体性、あるいは家族精神と規定するのである。

本来的にあるいは自然状態としての人々の意志の完全な統一として、家族精神を強調するのである。人間の本質意志として共に喜び悲しむという相互の連帯感情は、相互了解として、類似の体質や体験をもつのである。家族は最もその傾向を強くする。この家族の連帯感情において、お互いの感情の了解の重要性が大切なのである。家族というのは、愛情を基礎にしての情緒的関係によって、共に喜び、悲しむということを基礎にしているが、その共有感情も相互了解としての言葉を交わし合いながらの協働の体験が必要なのである。

家族は共同財としての所有と消費を共有するものである。積極的なゲマインシャフト的関係として、共同の福と共同の友があり、禍と敵の共有は、消極的な意志の対象である。不満や憎悪を対象とする否定的な共同意志では、願望の対象にならないとテンニースは、次のように述べる。

「ゲマインシャフト的生活は、相互的な所有と享楽であり、共同財の所有と享楽である。所有や享楽の意志は、防衛や防禦の意志である。共同の福—禍、共同の友—共同の敵。禍と敵は所有や享楽の対象ではない。それらは、積極的な意志の対象ではなく、消極的な意志の対象であり、不満の対象であり、憎悪の対象である。したがって否定的な共同意志の対象である。願望や欲求の対象と

なるものは、敵対的なものではなく、所有や享楽の対象と考えられる」。⁽²³⁾

願望や欲求ということは、継続性をつくり、未来を創造していく意志につながっていくものである。ゲマインシャフト的生活として、未来を創造していくのは、共同の福や共同の友という関係からである。ものごとには、福や友という積極的な事柄と禍や敵という消極的な事柄と、相反する関係があるが、積極的な事柄から願望の意志が生まれてくるのである。

田畠や家が継続するのは、ゲマインシャフト的生活の発展であり、それは、人間的な願望や欲求からの所有や享楽によってである。継続は自然的な状態であるが、人間的な積極的な意志としての理性的なゲマインシャフトによって達成されていくのである。このことについて、テンニースは次のように述べる。

「田畠や家との永続的関係によって、ゲマインシャフト的生活が発展する。この生活は、ただそれ自体からだけしか説明されない。なぜなら、この生活の萌芽、したがってこの生活の実在性はある程度まで事物の自然だから。ゲマインシャフト一般は、あらゆる有機的な生物の間に存在するが、人間的・理性的なゲマインシャフトは、人間の間に存在する」。⁽²⁴⁾

テンニースは、生物界の本能的な種族の自然継承性と人間的な田畠や家の継承性を人間的感情の理性の側面から福と友の積極的な意志を継続的ゲマインシャフト関係とするのである。不満や憎悪は、ゲマインシャフト的生活の消極的な意志であり、願望の觀念は生まれてこないとする。未来を創造していくには、ゲマインシャフト的積極的な感情である福と友の意志からである。

協働的な社会関係では福と友の意志が共有されていくのが容易であるが、競争的な社会関係では個々が敵対的感情になり、不満や憎悪が結果として生まれていくのである。競争的な社会では、人間的な享楽の共有ではなく、個々の享楽になっていく傾向が強くなっていく。

人間的享楽の典型として、飲食をテンニースはあげている。飲食は呼吸のように日々繰り返される人間的享楽である。飲食は人間の願望によって、生産と調理は欠かすことはできない。飲食の場は、人間的ゲマインシャフト生活として、家の核心であるとする。

「飲食は呼吸のように不斷にくりかえされる人間的享楽であるから、飲食物の生産と調理は欠くことのできない規則的な労働である。・・・かまどとその生き生きとした火は、いわば家そのものの核心であり本質である。それは、男も女も、老いも若きも、主人も僕も、すべての者が食事をとるためにその周囲に集まる場所である。そこで、かまでは人と食卓とは象徴的な意味をもつものとなる」。⁽²⁵⁾

飲食はゲマインシャフト的享楽であり、人間的家族の想いと文化の場である。食卓は、家族を結びつけるものである。飲食は、慣習によって各自の席をもち、飲食のための生産や調理は、人間的自然の規則的な労働によってゲマインシャフト的に結びつけられる。競争的な社会では、最も人間的な消費の場である飲食的な場さえ、個々の欲望のみの場になっていく。

家族と共に想いの場として食事をする機会の減少が現代的特徴である。家族の崩壊の要因は、一定の食事の場の減少によってみることができる。飲食は、家族の健康や家族の楽しみ、家族の想い

やりがみられるのであり、人間的関係の福や友もつくりだされていく。家族的に人間を基礎としての社会的な人間関係も飲食は大切なコミュニケーションの場となる。

ところで、ゲマインシャフト的生活としての家の存在の重要性をテンニースは強調したが、歴史的に家の継続性を考えていくうえで、農家の存在は大きい。農家は田畠と家の継続性は一体のものであった。村落は家を継承していく補完的な役割を果たしているのである。村落としてのゲマインシャフト的協力者として、村の鍛冶屋など様々な専門的な職種、技量が村落内での自然的分業として発展していくのである。

この自然的分業と競争社会による資本主義的な社会的分業とは本質的に異なるのである。資本主義的分業は、社会的貧困と人間的疎外をつくりだしていく。自然的分業は、村落内でそれぞれの仕事が役割として尊重されている。村落内の自然的分業は、村落内の各家の保持にとって不可欠であった。村落の象徴的な保護者として、精神的な統一や慣習が要求される。村落は農家が破壊されないように統一的に管理されているとテンニースは考えたのである。

「村落は、いわばその村の創立者・保護者としてその農家に奉仕するように、慣習によって義務づけられる。しかし、第二にあげられる村落の農家は、土地の規則的な耕作に真に適した固定的な家計の場であって、そこでは、欠くことのできない需要はすべて、自給自足されるか、あるいは、隣人やゲマインシャフト的な助力者（例えば村鍛冶やその他の製作者のよう）の援助によって補充される。しかしながら、農家が、破壊されることのない統一体として、あらゆる仕事場をみずからの中にもち、一つの屋根のもとにではないにしても、少なくともそれらを統一的に管理していることがある」。⁽²⁶⁾

村落の意志は、村の創始者や保護者を村人が奉ることによって成り立っているとテンニースは考える。それが、継承して持続するために慣習が自然的につくりだされる。慣習の義務は、村の創立者や保護者によって村が守られていくという村民の自然的な継承性の意志である。そこでは、農家個々も固定性と土地の規則性をもって自給自足的な生活のうえで成り立っている。村落の意志は保守的で停滞性をもっている。

それは、自然のなかで継承し、持続性をもってきた農民の生活形態からである。人間自身は自然に働きかけ、自然に挑戦し、自然を変革し、自然のなるがままではなく、自然や人為的災害などの危機に備える。そして、家族の生活の糧を貯蔵する。これらのことによって、村落社会の人々は、種族を繁栄させ、社会関係も発展させてきた。自然のなるがままでなく、人間は、本質的に変革性の側面もあるのである。村落社会の保守性と人間のもつている変革性がある。人類史的な発展の側面から村落社会の発展的形態をみる視点も重要である。これは、村落社会における進化論的な見方である。

ゲマインシャフト的感覚は血縁や空間的な接近や農村の人の非商業的な生活によって促進される。家共同体では人を支配するという生活形態を強く求める。村落共同体では仲間的生活の場面が強いとテンニースは考える。歴史的現実のなかでは、村落機構の組織のなかに家父長的支配が重要であ

るとする。家の意志は村落機構のなかで大切であり、村落機構の発達は、家父長的支配の充実によって達成されるとする。

「村落共同体に家父長的支配がまったく存在していないことはないと同様に、家共同体も同房的精神をまったくもたないわけではない。しかし、歴史的概念的見地にとっては、村落機構の組織のうちに力強く残存しているような家父長的支配だけが重要ななのである」。²⁷⁾

ところで、村落機構の組織のうちに力強く残存しているような家父長的支配だけが重要なのであると強調するテンニースの見方であるが、ここで確認しておきたいことは、家父長制が家の共同体に絶対的な条件ではないことである。歴史的に、家族経営を基礎にした農村経済では、家父長制の形態を家共同体の基礎である形態が多かった。それは、家の財産所有からきている。従って、家父長制が家共同体の宿命ではない。

家としての情緒的な生活共同体的機能と、財産的所有に基づく生産の統括指揮の側面と両面がある。家の共同体関係が拡大されていくほど、家父長制的機能は強くなっていく。家の継承性は、伝統と慣習によって象徴化され、家長の権威が強くなっている。所有意識が弱く、財産を基本的に男性に継承しない母系的な村落社会では、家父長制は存在しない。母と大地が結びついて自然的占有として継承されていく。ここでは、強固な所有の意識は生まれてこない。

村落共同体の統一の物質的な基礎として、共有地がある。この共有地はゲマインシャフト的結合の目的に使われている。村落の構成員が結合された目的のために使用されるとテンニースは次のように述べる。

「共有地は、村落共同体の活動と関心の対象であって、その一部は統一体のゲマインシャフト的目的のために、一部は成員たちの結合された同一目的のために設けられている」。²⁸⁾

村落の構成員の家共同体を結合させる社会的な基盤は、共有地である。この結合は、ゲマインシャフト的結合として、地縁と血縁によって、伝統的に慣習によって結合されているのである。

さらに、宗教は、共有地とともに、ゲマインシャフトの結合をつくりだす。宗教は、ゲマインシャフト的感覚の産物であるが、村落生活において自然力の崇拜としてもっとも気持ちのよい関係となつた。それは、個々に自由に判断しての信仰の自由としての精神の内面化ではなく、すでに自然的に自己の生活のうえにある伝統的な慣習によっての精神的な結合としての宗教である。

しかし、村落生活以上に、都市では、神々の像をつくり、神々を自己の身近な精神的支柱にした。都市の神々は、自然力の崇拜ではなく、人為的に偶像化し、宗教的に情操の発達をつくりだした。つまり、都市の生活は宗教的理念や宗教的芸術を強くしたのであるとテンニースは次のように述べる。

「都市の生活が複雑多岐になればなるほど、また、友情的感情や活動および内面的熟知や相互的羞恥の基礎をなす血縁関係や近隣関係が、その力を失うか、あるいは狭い範囲に限られてくればくるほど、このような宗教的因素はますます必要になる。宗教的習俗としての芸術に対する関心がますます強まる。なぜなら、善なるもの、崇高なるもの、および、この意味において聖なるものが

思想や良心に影響をおよぼすためには、感覚によって知覚されなければならない」。²⁹⁾

都市において発展していく宗教的な理念や芸術は、血縁や地縁からの宗教的統一要素の喪失からである。都市住民の宗教生活は、宗教的な感覚によって個々の思想や良心を確立するようになつた。宗教が個人化して、そして、それぞれの信仰心によって結合して精神的支柱として、宗教的理諦や芸術が発展してきたとテンニースは考えるのである。都市では、宗教に対する個々人の目的意識が存在しているのであり、村落生活のように民俗的慣習のなかでの宗教的な生活ではないのである。ここでの宗教的な生活は、血縁や地縁関係によるゲマインシャフト的生活ではなくなっている。

テンニースは、ゲマインシャフトに対してゲゼルシャフトの概念をどのように考えているのか。ゲゼルシャフトは、統一体の意志や活動は行われず、人々は自分以外のすべての人々の関係を緊張させるとテンニースは次のようにみるのである。

「ゲゼルシャフトでは、あらゆる結合にかかわらず分離しづける。その結果ゲゼルシャフトにおいては、先駆的・必然的に存在する統一体から導きだされるような活動は行われない。したがつてまた、活動が個人によって為されるかぎり、その個人に内在する統一体の意志や精神を表現するような活動や、その個人自身よりも彼と結合している人々のためになるような活動は行われない。それどころかここでは、人々はそれぞれ一人ぼっちであって、自分以外のすべての人々に対しては緊張状態にある」。³⁰⁾

ゲゼルシャフトでは、目的機能的に結合が行われるが、目的が達成されれば個々は分離していく。従つて、統一体からの活動は行われないのである。ゲゼルシャフトで個々は独立したものであり、利害目的関係によって結ばれたものである。本質的に人々は孤立した存在であるのがゲゼルシャフト的結合である。他の関係では常に緊張関係をもつてゐるのであるとテンニースはみるのである。

ところが、孤立した緊張関係をもつてゐるゲゼルシャフトでは、個々が意欲的に活動するものであり、抽象的、理性つまり科学的理性によって考える人間になるとする。科学的概念は、感覚複合体としてテンニースは次のように考える。

「ゲゼルシャフトは、意欲し活動するものと考えられるかぎり、抽象的理性以外の何もでもないから。ある特殊な見方をするならば、抽象的理性とは科学的理性であり、その主体は、客観的関係を認識する人間、すなわち概念的にものを考える人間である。したがつて科学的概念は、その一般的な起源とその物的性質（客観的性質）から見て、感覚複合体に名称を与えるところの判断であり、科学的概念が科学において占める地位は、商品がゲゼルシャフトにおいて占める地位と同様である」。³¹⁾

いうまでもなく、科学的な概念の形成は、人間としての一人前の教育の過程を長期化していく。一人前の子どもの教育が専門家によって担われていく段階に入る。つまり、近代的な学校が生まれていく。村落生活における伝統の継承と一人前への子育てとが異なっていく。

ゲゼルシャフト的結合は、理性的な人間関係による結合であり、その理性的結合は、契約によつて成立していく。ゲゼルシャフト的行動は、契約による行動と協力である。このゲゼルシャフトの

関係について、テンニースは次のように述べる。

「多くの人々は、ある同一の活動のために対外的に結びついて、それぞれ他人の実際の行動を自分に対する助力として享受することができる。そして遂に多くの人々は、一致してこのかれらの結合体を、かれ自身と同様な個人的性質をもった独立的な実在と考え、特殊な意志と行為の能力を、したがってまた契約を結んだり、義務を負ったりする能力を、この擬制的な人格に与えるに至る。しかしこの擬制的な人格は、他のありとあらゆる契約の内容と同様に、ゲゼルシャフトが多くの人々の右に述べたような考え方や行動に協力し、したがってこの擬制的人格の存在を保証するよう見えているかぎりにおいてのみ、客観的・現実的なものと考えられるにすぎない」。⁽³²⁾

目的による同一の活動を保証するために人々は契約を結び、義務を果たす。この義務を果たす能力を遂行する人間を契約によってつくられた擬似的な人格とする。契約は、ゲゼルシャフト的結合の象徴的な行為である。ゲゼルシャフト的関係は、協約と自然法によっての結合の複合体であり、それぞれの契約の主体は、独立した存在として次のようにテンニースは考える。

「協約と自然法によって結合された複合体であるゲゼルシャフトは、自然的および人為的な多数個人の集まりとして理解される。そしてこれら諸個人の意志や領域は、相互に無数の関係をとり結んでいるが、しかし依然として互いに独立しており、その間に内的な相互作用は存在していない」。⁽³³⁾

ゲゼルシャフト的結合は、互いに独立した存在のなかで、契約によって結合されたものであり、内的に一体としての相互作用はないとテンニースは考えたのである。ゲゼルシャフトとゲマインシャフトの人間的結合を考えていくうえで、人間のもっている本質をみていく。習慣という行為に人間の普遍的認識を加味して、習慣を人間の精神の本質的・実質的要素として、テンニースは次のように考える。

「人間は習慣の動物であり習慣の奴隸であるなどと言われるが、この命題には正しい普遍的認識が含まれている。人間が一種の動物として他の大きな類概念である有機的生物に対立するものであるかぎり、習慣は人間の精神の本質的・実質的な要素である。習練したがって習慣はすべて、なんらかの感性的な知覚を前提とする」。⁽³⁴⁾

習慣は、人間にとっての本質であり、感性的な知覚を前提にするとテンニースはみるのである。つまり、科学による理性的認識よりも、生まれもった感性を自然的に統一したものとして、人間の行為を必然化しているのである。

そして、特殊的な人間生命活動結合の保持のためには学習が必要であると。学習は経験と模倣によって、なにが正しいことであるかを知ることができる。人間は学習することによって、なにが正しいことであるか、なにが価値あるものかを知ることが人間記憶の真の宝であると次のようにテンニースは述べる。

「特殊な結合は、その本質上人間特有の天賦の才能によって規定されているあらゆる活動のうちに存在している。学習とは、一部はみずから経験することであり、一部は模倣することであるが、

しかし特にそれは、正しく善なるためにはある事をどのようになさなければならないか、またどんなものが有益で価値あるものであるか、ということに関する指示や教示を受けることである。したがってこのことが、すなわち、愛したり行ったりするために、何が正しいことであるか、何が善であるかということを知ることが、記憶の真の宝なのである」。⁽³⁵⁾

発達した習慣と模倣は、学習によって一層強化されていく。学習によって獲得された記憶は、人間の天性であるとテンニースは考える。習慣や記憶は、人間の恵まれた天与から与えられた本質的要素である。

「恵まれた環境のもとでは全有機体の単純なる生長と共に発達するものであると考えるならば、習慣は（習練によって発達せしめられるものとして）第二の天性であり、記憶は（模倣と学習によって発達せしめられるもとして）第三の天性である」。⁽³⁶⁾

ところで、本質意志と選択意志は、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの理論に対応して、テンニースの重要な概念である。ゲマインシャフトに対応する人間の意志として、本質意志を提起する。選択意志は、本質意志の分離として人間の発達した意志として形成されていく。本質意志は選択意志を抑制し、自由や支配に対抗するとテンニースは次のように指摘する。

「選択意志がますます決定的なものに発達したり、あるいは、思惟が目的に集中し手段の知識・獲得・適用に集中すればするほど、本質意志の特殊性または個別性を形成する感情複合体や思想複合体は、使用されないことのためにはますます危機に瀕するばかりでなく、選択意志との間に直接的に対抗することによって生ずる。なぜなら、本質意志は選択意志を抑制し、その自由や支配に対するものに対して、選択意志はまず本質意志から分離し、次いで本質意志を分解、否定または支配しようと努めるから」。⁽³⁷⁾

ゲゼルシャフトの発展は、本質的意志の分解として、選択意志が発達していく。この選択意志が、自由になっていくのは、感情や欲望のなるがままでなく、選択意志は、契約という理性的意志の結合によって行われていくのである。さらに、人間の選択意志は、自己の行為を自らが選ぶことできる対象にかぎられる。人間の行為のなかには自らが選ぶことのできないことがある。自然災害に対する人間の行為は個々の選択からの身の安全というよりも集団的な認識と対応が求められる。個々の意志の自由は選択意志によって実現していく。テンニースは、人間の選択意志による自由は限定されたものであるとして次のように述べる。

「意志の真の自由は意志の存在それ自体のうちに存するのである。その他なお、人間の思惟にとっては想像的な自由が存在するが、しかしそれは次のような場合に限られる。すなわち、人間が自己的行為・不作為をみずから選ぶことのできる対象と考える場合に、あるいは、人間が自己のそのものを形成したり構成したりする場合、したがって、彼が実際に主人として、また自由な創造者として、意志という彼の思想の産物に対立していると考えられる場合に限られる」。⁽³⁸⁾

人間の意志の自由は、創造者として、かれの思想の産物など自由に振る舞うことができる状況に限定されているのである。そこでは、自分自身が主人となっている。自分が理性的に主人として行

為をできない場合は、数多くある。自然に対する人間の限定性、国家や社会制度での個々の限定性、関係を結び他の人の理性的相互作用での限定性などがある。良心による人間関係は、庶民階級の人々によって実際に生きているとテニースは考えられる。その意志は、自然的なもの、慣習なものである。良心が根源的に受け入れる人間の関係と、そうではない人間の関係が社会的に存在している。

「良心は庶民階級の人々のうちにのみ実際に生きている、といわなければならない。良心は、個々人によって特殊な仕方で所有されている共有財であり共有の器官である。良心は、一般的な意志や精神とか伝統的な考え方によれば、生まれてくる者に素質として遺伝される。良心は、その人自身の本能や習慣に関する記憶の本質的内容として、したがって近親者に対して感ずる次第に強まりゆく愛の確証・聖化として、また自分の善悪に対する感情および他人の善悪に関する鑑識として、思惟全体と共に生長していく。この場合、善とは、自然的なもの、習慣的なもの、是認された者であり、悪とは、反自然的なもの、異常なもの、非難されたものである。したがって、この良心の作用だけを受け入れる人々の間では、一般に親愛や親切が善とされ、反抗や立腹や我儘が悪とされる。とくに年長の者や強い者や命令者に対して服従し、かれらの意志に完全に心服することか善なりと感ぜられ、これに反して、かれらに対する不従順や我儘や詐欺は悪と感ぜられる」。³⁹⁾

良心は、自然的、慣習なものであるが、それは、ゲマインシャフト的結合で近親者に愛情の確証として典型的にあらわれる。それは理性による合理的な世界のなかのものではない。良心のもつとも単純な現象は、恐怖と怒りの混合する羞恥心である。羞恥心は本質的意志の形態であり、ゲマインシャフト的な意志である。

「何人を悪い評判に耐えることはできない、彼は、悪い評判をうけることによって我と我が身に嘔吐をもよおし、自己を実際以上に悪い人間に感ずる」。⁴⁰⁾

これらの良心の感情は、普遍的な権威や権力によって、ますます拡大、純化していく。良心の感情は個別的な家族的愛情に典型にみられるように、情緒的な人間関係による従順である。それが、社会に普遍化したり、社会的権威や国家の権力と結びついたときに、どのようになるのか。そこには、絶対化した神や権威が現れるのである。神聖にして見えざる神に対してはなおさら強くなる。この情緒的意志は、教養ある知識、啓蒙された選択意志の所有者によって、破壊されると。

この感情から解放される選択意志が人間的精神の自由の最高の表現としての意識性であるとテニースはつぎのように規定する。

「目的的な愚かな感情に従つてではなく、はつきりと把握することのできる基礎だけにもとづいて自己の行動を律しようと決心しており、またそうする権利を有しているからである。かかる選択的意志の特殊な人生感は、この書物の中で意識性として理解されているものである。意識性は、選択的意志の自由の最高表現である」。⁴¹⁾

市場によって、ゲマインシャフト的基礎から遊離すればするほど選択意志の主体は、自己の目的

によってのみ知識を得るようになる。個々の欲望の増大によって知識は拡大していく。この知識の拡大によって、価値の多様化が進められていく。目的の画一化は、その多様化を困難にしていくのである。資本主義的市場の限定性から人間的な価値の多様性、文化の多様性ということを知識の拡大によって得られていく。このことは、人間の自然的、文化的慣習などの本質意志の側面も大切なことを意味している。テニースは、知識の拡大は欲望の増大と多様化であると次のように述べている。

「対象を知るということは、目的を達成するための必要な条件であり、自己の意志のままになる、もしくは手に入れることのできる手段を知るということは、手段を使用するための前提条件である。したがって、知識の拡大は欲望の増大と多様化を意味しております」。⁴²⁾

大都市やゲゼルシャフトでは、モラルの面から堕落の危険があり、若い人には利潤をつくったり、資本家になるようなことはすべきではないということを人間的なモラルの側面からテニースはのべているのである。子どもたちはゲマインシャフト的な町や村の方がすぐ伸びるということである。

「子どもたちの性質は町や村ではすぐ伸びるが、大都市やゲゼルシャフトという大きな世界では腐敗堕落の危険に曝される。遊技・習練・学習というような労働は、若い人々の身体および知性の力を増進させる。商業を営んだり、利潤を作ったり、資本家になるようなことは、若い人々のなすべきことではない」。⁴³⁾

青少年たちにベンチャー企業起こしの教育をしたり、商業的な利潤追求の教育をしたりすることは、精神的な退廃をつくりだすことになるとテニースはみていたのである。資本主義において、その人間的な社会をつくりだす未来のための教育をするために、ゲマインシャフト的精神の促進、社会的心情の扶植、良心の育成の重要性を指摘する。ゲマインシャフト的精神は資本主義社会において、社会的勢力として、その妨げがなければ自然と、その方向に進んでいくとテニースは楽観的に次のように考えるのである。

「資本主義社会の将来の主体は、教育によって、組織的に正しい思惟の持ち主たらしめられなければならない。このことは、本来的には、ゲマインシャフト的精神の促進、したがって社会的心情の扶植、気立の洗練ならびに良心の形式と一致するばかりではなく、もし社会的勢力の妨げがなければ、ゲマインシャフト的精神は自然にこの方向に発展するに相違ないであろう」。⁴⁴⁾

テニースは、ゲマインシャフト的感情が、社会的権威や国家権力と結びついたときに、人々の盲従的な行為が生まれてくるとした。人類はファシズムというゲマインシャフト的絶対的な独裁国家体制を歴史的につくりだした。危機に対する民族的心情、没落していく中間層の情緒性、貧困化していく大衆の英雄待望主義は、国家権力や権威と結びついたゲマインシャフト的感情である。

資本主義的競争主義のなかでは、ゲマインシャフト的精神が、人間的本質を見つめる人間的感情からの社会的な連帯意識が自然的に形成されていくのか。むしろ、目的意識的に人間的な良心の教育が社会的にも地域的にも、成人教育や学校教育のなかでも展開される必要があるのである。

科学と教育、人間的良心と教育、人間的連帯と教育という目的意識性がなければ難しいのである。テンニースの指摘した「資本主義社会の将来の主体は、教育によって、組織的に正しい思惟の持ち主たらしめられなければならない」ことは、ことさら強調しなければならないのである。結合度の強い統一体を団結体とし、結合度の緩い関係を連結体として、結合に関する社会的存在の二つの根本形態をテンニースは次のように考えた。

「ゲマインシャフト的団結体からゲマインシャフト的連結体の発展を示すであろう。次いでゲゼルシャフト的連結体に変わり、最後にゲゼルシャフト的団結体が生じるであろう」。⁽⁴⁵⁾

ゲマインシャフトな団結体の典型は家族である。ゲマインシャフト的連結体のもっとも完全なものは友情である。精神のゲマインシャフトは共通の仕事や共通の信仰があるが、親方と徒弟は、ゲマインシャフト的な連結体である。商業取引のように契約や雇用契約などはゲゼルシャフト的連結体である。

テンニースにとって、契約関係から、さらに、ゲゼルシャフト的団結に発展していく論理が大切なのである。ゲゼルシャフト的団結体は、個々の目的意志の成果が持続的な活動が保証されたものである。それは、より高次の選択意志による活動であり、社会的連帯意識に基づく目的結社の性格を求めるものである。

ゲゼルシャフト的団結体は、資本主義による自由市場契約から社会的に持続性をもった契約としての協定、社会的な目的によって組織された持続関係を意味しているのである。自由な個人商人から株式化した会社組織は、ゲゼルシャフト的連結体からゲゼルシャフト的団結の発展を意味するとテンニースは考える。つまり、連絡体から団結への発展の重要性である。

資本主義の発展による生産や生活の社会化に伴う社会的組織の整備は、ゲゼルシャフト的団結体の発展である。ここで、ゲゼルシャフト的団結が、選択意志の自由の持続性ということで、高次の選択意志による活動が保証されていくのかという問題がある。組織化ということでの持続可能性ということでの個々の選択意志がよりコミュニティやアソシエーションのなかでどのように保証されていくのかという課題があるのである。

社会的組織化は官僚制を生み出し、個々の自由な意志から離れて、制度や機構のなかで独自に動いていく。それが大きくなればなるほど個々の意志から遊離していく。高次の選択意志が集合的に機能していくための構成員の意志の合意やその目的や方法の学習による理性的判断が重要になっているのである。高次の選択意志というゲゼルシャフト的団結体の持続性は構成員の学習と理性の発展による社会的な共有性と協働性の形成なくしては、実現の可能性をもちえないのである。

（4）マルクスの資本主義に先行する諸形態からみる共同体論

資本主義の形成には、自由な労働者が必要であった。それは、自由に労働力市場に売り手として出現し、生産手段から離れているということで自由であるとことである。マルクスは、資本主義的生産様式の前提条件に、土地に縛り付けられていることから、自分自身の労働力を自由に処分でき

る自由な労働者の存在を次のように述べている。

「直接生産者、労働者は、彼が土地に縛りつけられていて他人の農奴または隸農になっていることをやめてから、はじめて自分の一身を自由に処分することができるようになった。自分の商品の市場がみつかればどこへでもそれをもって行くという労働力の自由な売り手になるためには、彼らはさらに同職組合の支配、すなわちその徒弟・職人規則やじやまになる労働規定からも解放されなければならない」。⁽⁴⁶⁾

自由な労働者の創出は、農村住民からの土地収奪であった。農村住民からの土地の収奪は、かれらの土地から得る生活手段を奪うことであり、生存の条件をうしなっていく自由な労働者の創出である。絶対的封建領主による自由な自営農民の土地収奪が長期にわたって行われた。共同地の暴力的横領が多くは耕地の牧場化になった。そして、大規模な資本借地農場を形成していった。封建的束縛から自由になっていく代償に生存手段を失う過酷な自由の労働者が必要であったのである。自由な労働者の創出は、土地の束縛からの自由と自己の労働力の処分の自由であり、決して、生存と文化からの自立性という自由ではない。マルクスは、自由なる労働者の創出について次のように述べている。

「封建家臣団の解体や断続的な暴力的な土地の収奪によって追い払われた人々、このような無保護のプロレタリアーとは、それが生み出されたと同じような早さでは、新たに起きてくるマニファクチャによって吸収されることができなかつた。他方、自分たちの歩き慣れた生活の軌道から突然投げ出された人々も、にわかに新しい状態の規律に慣れることはできなかつた。彼らは群れをして乞食になり、盗賊になり浮浪人になつた。」⁽⁴⁷⁾

土地の束縛から自由になった労働者は、暴力的に土地から追われていくが、全くの生存の保護のない状態のなかで、自分たちの歩き慣れた生活から放り出されていったのである。それは、新たなマニファクチャの労働力として、即座に吸収されることはなく、盗賊や放浪者として、無軌道な群れをなしたのである。自由になった労働者は、新しい状態のマニファクチャの工場労働者の規律に慣れるることはなかつた。

大きな生活様式の変貌のなかで、新たな生活の準備としての人間的教育や訓練なしに放り出されたのである。むしろ、新たな生活や仕事の人間的な余裕をもつた教育や訓練ではなく、強制的に国家の法によって労働するようにむち打ちされたのである。自由な教育ではなく、強制的に新たな労働に順応するように訓練されたのである。このことについて、マルクスは次のように述べている。

「暴力的に土地を収奪され追われた浮浪人にされた農村民は、奇怪な恐ろしい法律によって、貧労労働者の制度に必要な訓練を受けるためにむち打たれ、焼き印を押され、拷問されたのである。一方の極に労働条件が資本として現れ、他方の極に自分の労働力のほかに売るものがないようにすることだけでは、まだ十分ではない。このような人が自発的に自分を売らざるをえないようになるとことだけでも、まだ十分ではない。資本主義的生産が進むにつれて、教育や伝統や慣習によってこの生産様式の諸要求を自明な自然法則として認める労働者階級が発展してくる」。⁽⁴⁸⁾

土地を奪われて自由な労働者になった農村住民は、自発的に自分の労働力を売って生活するようになるまでには、一定の教育の期間が世代に必要であったのである。土地に縛り付けられた農村住民が収奪されて自由な労働者になるまえに盜賊や浮浪人という無政府的な生活形態を経験するのである。

農村にあったゲマインシャフト的共同体の関係は、一挙に無政府性な生活につきおとされるのである。近代的に組織された労働者になるまでには、一定の期間と世代的にわたる教育が必要であったのである。農村住民の土地の収奪は、都市と農村の住民の対立から都市のなかで、農村的文化を強くもった浮浪人層という都市での無秩序になる貧困層をつくりだした。生存や文化の自立は、教育と訓練を保障する社会的制度が求められているのである。

農村住民の土地の収奪は、人間の天然の仕事場である大地からの遊離でもあった。天然の仕事である大地との分離は、共同体的土地の所有の解体でもあった。自然的統一の共同体的土地所有からの分離である。マルクスは、個人が土地の主人として、他人にたいしても同様に共同体的所有をとおして、主人として関係していることを次のように述べる。

「個人は自分を実現する諸条件も所有者として、主人として自分自身に関係している。個人は同様に他人に対しても関係している。……個人は財産の共同所有者として他人、同じく共同財産の体现者として他人と関係することになるし、あるいは彼自身とならんで自立する所有者、自立的な私的所有者として他人と関係することになる」。⁴⁹⁾

個人は労働者としてではなく、所有者として、同時に労働もする共同体の構成員としてふるまうのである。所有は自分のもとして自由にふるまえる自己の肉体の延長である。所有は、所有者である人間の自由な処分であり、自然に対する所有者の自分自身の関係であることを社会的に認めている。いうまでもなく、共同の所有は構成する個々の共同の意志によって処分されていくものである。それは、共同体としての自由である。所有についてマルクスは次のように述べる。

「本源的には自分に属するものとしての、自分のものとして、人間固有の定住とともに前提されたものとしての自然的生産条件に対する人間の関係行為のことにはかならない。すなわち自己の肉体のいわば延長をなすにすぎない」とマルクスはとらえる。⁵⁰⁾

種族共同社会、自然的共同団体は、土地の共同的領有と利用の前提条件としてあらわれる。人間は、共同体、生きた労働のかたちで自己を生産し、また再生産するところの共同団体財産である大地と素朴に関係する。この本源的共同社会がどの程度まで変形されるかは、気候、地理的、物理的等の条件とともに、種族の性格などに依存するとマルクスは考える。⁵¹⁾

人間らしく働くということや人間らしい暮らしということで、人間の本質を現代的にみていくうえで、近代社会で形成されていく人権の概念は重要であるが、その人権の概念を人類史的視点から深めていく課題がある。人間にとつての本質的な存在として、社会的に共同性をもっていたことの歴史性が大切なである。

その共同性が自由な労働者の創出により、新たな社会的な個を尊重する意味での協同性に転化す

る可能性をもっている。人権の問題を人間の社会的存在としての協同性という視点から深めていく場合に、孤独からの解放として、地域的絆、職場での協働性、仲間としてのグループや団体、友愛と社会的連帯の創出をみていくことが重要である。ここには、共同体からの自由な労働者の創出、孤独、疎外から高次の共同性の創造という否定の否定の弁証法という論理がある。

本源的共同社会、種族共同社会、自然的共同団体などの所有の変形として、奴隸制や農奴制をみているこのことは、その共同社会での人間の労働の生産条件にたいする主体の問題が大切なのである。

資本主義は、生産条件と労働の主体が分離していくことで、所有と労働の分離、さらに、経営と労働の分離が行われ、労働疎外が生み出されていく。ここに、人間的自立の問題の根本問題がある。自ら主体的に意欲し、労働の主人公として、さらに、生活の主人公としての人間的自立の問題を考えていく根本がここにある。人間の自立を社会的にみていくうえで、マルクスは所有や労働疎外の問題を重視したのである。

資本主義に先行する諸形態では、人間は大地と所有または領有關係をもち、経営と労働における人間的自立をもっていたのである。資本主義は、この人間的本質を分離して、人間的疎外をつくりだしたのである。そして、疎外的状況を克服していく展望として、所有、経営、労働の分離から再統合の道を人間的理性、科学的認識のもとに意識的に組織していくことが求められていくのである。この意味で、人間的労働を本質的にみていくうえで、人類史的な視点から種族共同社会での労働と所有の問題をみてめていくことの重要性をマルクスは次のように述べる。

「種族によって制服された他の種族、すなわち従属させられた種族をして財産を喪失させ、そしてこの種族自身を、共同団体が自分のものとして関係をむすび、その再生産の非有機的条件のなかに投げ入れる。だから奴隸制と農奴制とは、種族団体のもとづく所有が一段発展したものにすぎない。両者はそうした所有のあらゆる形態を必然的に変形させる。アジア的形態ではこの変形をおこなうことがもっとも少ない」。⁵²⁾

マルクスは、奴隸制と農奴制は、征服者による種族団体の所有の変形とみるのである。変形させることは、本源的な共同社会が、消滅しているのではない。そこでは、人間固有の定住性の前提である共同財産である大地に対する人間の関係行為が、本質的に生きているのである。その自然に対する人間の関係行為の結果は、所有の形態の変化によって変わっていくのである。

人類史的発展形態は、生産様式からみると、原初的共同社会の生産様式、アジア的生産様式、奴隸的生産様式、封建的生産様式は、資本主義的な生産様式の前史であるが、それらの生産様式は、共同体社会を本質的に内在しているのである。共同体社会が崩壊されることによって、自由な労働者をつくりだすことによって、資本主義的生産様式の基盤がつくりだされたのである。

原始の類人猿が、人間になっていくのは、種族共同社会が生まれたことによってである。人間の起源と共同体社会の起源は一体であった。この共同体社会を根底から崩壊させていったのが資本主義の生産様式であった。人間の本質をみていくうえで、共同体の存在は、極めて大きなものがあつ

たのであった。崩壊していく共同体によって、新たに自由になった労働者がいかに人間的に連帯していくか、地域の共同体の社会が崩壊していくなかで、いかにして人間的連帯のコミュニティをつくりあげていくのか。

人類史的発展からみるならば、共同体社会から自由になった人々は社会的結合や協働関係への模索が必要になっていくのである。この模索をしていくうえで、マルクスが問題にした資本主義に先行する共同体のアジア的形態、ローマ的形態、ゲルマン的形態を探っていくことが必要である。このことは、それぞれの世界史的に民族の発展、地理的、自然的、植民化の違いによって、その意識や文化、諸能力の発現形態をみていくうえで、重要なことである。

資本主義的市場の商品文化は、普遍化していく。しかし、資本主義の発展にも関わらず各国民族意識や文化は、歴史性によって大きく異なる。資本主義の発展の特殊性は、その歴史性によってあらわれてくる。新たな人間的な連帯、社会的結合や協働の関係形態も歴史性を無視することができない。この意味でマルクスの資本主義的生産に先行する諸形態としての共同体の問題や資本主義発展の歴史的進展の違いは、大きな課題になってくる。

アジア的形態は、種族共同社会という本源的共同社会の小さな大地を占有している共同団体のうえに、上位の所有者としての総括的統一体があらわれているのである。用水路、灌漑施設、交通手段などは上位の総括的統一体をつくりあげていく社会的基盤であり、それは、専制政府の事業として行われる。

この場合の本来の都市は、対外貿易に特別有利な地点や国家の首長の居住するところに形成される。このアジア的形態の共同体は、頑強で、もっとも長く維持される。この共同体は、農業と工業の自給自足性の一体性をもち、上位の統括的統一体が所有者となり、小さな共同体の個々人は所有者とならず、ただ占有者となるにすぎない。

ローマ的共同体は、農耕者の定住地として都市を想定している。農耕地は都市の領域として現れる。共同団体が出会う困難は、他の共同団体からの侵略であり、戦争は、重大な共同体を守る仕事になる。共同体は、軍事的に編成される。個々人は、共同体の構成員として私的所有者である。共同体は自由平等な私的所有者相互の関係、外部に対する彼らの結合である。

ゲルマン的共同体の形態は、農村生活を中心とする。共同体は連合体ではなく、その統一する血統、言語、共通の歴史である。それは、その時々の連合としてあらわれる。共同体は、公有地などの管理や外的に対する防衛、信仰のために自由な土地所有者の集会によって成り立つ。共同体は、孤立した自立的な家族の同盟として現れる。

この三つの形態について、マルクスは資本主義的生産に先行する諸形態で、資本の本源的蓄積、資本と労働の形成過程として分析しているが、それらの共同体の形態は、資本主義の形成と発展の地域的な特殊性の歴史的基盤として重要な社会的基盤である。この三つの形態は、奴隸制や封建制という人類史的な社会的発展や資本主義の形成と発展という意味から段階的に理解されるものではない。アジア的生産様式の停滞性ということで、稲作のモンスーンエリアでは、灌漑用水路や堤

防など河川工事などの共同体の仕事は、かれらの生産や生活にとって大きな役割をもっている。

上位の総括的統一体としてのアジア的専制の社会的基盤がここにあり、停滞性もここにあったのである。21世紀に入った今日の、グローバル化した資本主義の発展の速度の面からみると、その停滞性ということより、速度の速さがアジア諸国でみられるのである。アジア的生産様式の社会的な基盤を一挙に解体するのではなく、それらが残存し、再編成されて、グローバル化した資本主義が発展していくのであった。それは、遅れて資本主義の形成をみたという後発的資本主義ということだけではなく、独自にアジア的共同体の形態を内包させながら、その解体過程の進行が緩慢に進んでいくのである。

まとめ

本論では、人間論を社会学的なベースからコミュニティ論に焦点をしづって展開した。この焦点のなかに、近代の資本主義社会の形成や発展における分業による人間疎外と人間的自立の課題をマッキーバーのコミュニティ論、テンニースのゲマインシャフト、マルクスの共同体論から明らかにした。

マッキーバーは資本主義の分業の発展のなかで、社会関係がより複雑になり、人間が仲間と仲間の関係を発達させることを基本的に考えていた。それは、社会性と個性の発達と同一の歩調であった。マッキーバーのコミュニティ論は、前近代的な固定した関係からではなく、近代化のなかで複雑化している社会関係のなかで人間の共同化の精神を共同生活のなかから求めたものであった。分業社会のなかで発展していく目的別の組織であるアソシエーションを重視したのもマッキーバーの特徴であった。かれは、アソシエーションをコミュニティのなかに包みこんでいく論理であった。

テンニースは、資本主義の発展による分業によって、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトに移行していく論理を明らかにした。ゲゼルシャフト的結合は、互いに独立した存在のなかで契約によって結合されたものであり、内的に一体としての相互作用はないとの論理である。ゲゼルシャフトとゲマインシャフトの人間的結合を考えていくうえで、テンニースは、人間のもつている本質をみていく。

ゲマインシャフトな団結体の典型は家族である。ゲマインシャフト的連結体のもっとも完全なものは友情である。精神のゲマインシャフトは共通の仕事や共通の信仰がある。テンニースにとって、契約関係から、さらに、高次のゲゼルシャフト的団結に発展していく論理が大切なのである。ゲゼルシャフト的団結体は、個々の目的意志の成果が持続的な活動が保証されたものである。それは、科学的理性によるより高次な選択意志による活動であり、目的結社の性格をもつものである。この達成には理性、科学による教育が大きな役割を果たすとしたのである。

マルクスは、近代の資本主義の形成にとっては、共同体から自由になった労働者が必要であったと考える。土地を奪われて自由な労働者になった農村住民は、自発的に自分の労働力を売って生活

するようになるまでには、一定の教育の期間が世代的に必要であったのである。土地に縛り付けられた農村住民が収奪されて自由な労働者になるまえに盜賊や浮浪人という無政府的な生活形態を経験するのである。農村にあったゲマインシャフト的共同体の関係は、一挙に無政府性の生活につき落とされたのである。

日本のように自由な労働者の形成は、イギリスとは大きく異なっている。兼業農家が広範に存在し、都市から農村の労働力の移動に出稼ぎ型の賃労働者や学卒労働力が大きな役割を果たした。一挙に農家の全員が離農して都市に移動する形態は少なかったのである。自由な労働者の形成過程などの近代資本主義のそれぞれの国や民族の特殊性を考えていくうえで、資本主義に先行する共同体の諸形態の存在があったことを本論では問題にしたのである。

自立という問題を考えていくうえで、個人のなかに閉じこめて、個人の自立を問題にしていくことは、自立を社会や集団との関係でみないことである。人間は社会的存在であるという人間自身の本質のことからの自立の解明にならない。本論では、資本主義による人間疎外を克服していくうえで、人間の社会的存在の認識、教育のもつている重要性を明らかにした。この際に、人間の基礎的な社会的存在としてのコミュニティの大切を確認したものである。

注

- (1) R.N.マッキバー「コミュニティ」中久朗・松本道晴監訳、ミネルバ書房、46頁
- (2) 前掲書、46頁～47頁
- (3) 前掲書、56頁～58頁
- (4) 前掲書、101頁
- (5) 前掲書、193頁～194頁
- (6) 前掲書、196頁
- (7) 前掲書、242頁～243頁
- (8) 前掲書、243頁
- (9) 前掲書、244頁
- (10) 前掲書、252頁
- (11) 前掲書、253頁
- (12) 前掲書、255頁
- (13) 前掲書、256頁
- (14) 前掲書、285頁
- (15) 前掲書、322頁
- (16) 前掲書、369頁
- (17) 前掲書、382頁
- (18) 前掲書、392頁
- (19) 前掲書、398頁
- (20) テンニース・杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」上、岩波文庫、37頁

- (21) 前掲書、41頁
- (22) 前掲書、59頁
- (23) 前掲書、65頁
- (24) 前掲書、67頁
- (25) 前掲書、72頁
- (26) 前掲書、74頁
- (27) 前掲書、77頁
- (28) 前掲書、81頁
- (29) 前掲書、88頁
- (30) 前掲書、91頁
- (31) 前掲書、102頁
- (32) 前掲書、110頁
- (33) 前掲書、112頁
- (34) 前掲書、178頁
- (35) 前掲書、182頁
- (36) 前掲書188頁
- (37) テンニース・杉之原寿一訳「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」下、岩波文庫、27頁
- (38) 前掲書、45頁
- (39) 前掲書、59頁
- (40) 前掲書、63頁
- (41) 前掲書、61頁
- (42) 前掲書、65頁
- (43) 前掲書、77頁
- (44) 前掲書、77頁
- (45) 前掲書、125頁～126頁
- (46) マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳「資本論第1巻」、大月書店935頁
- (47) 前掲書、959頁
- (48) 前掲書、963頁
- (49) カール・マルクス・手島正毅訳「資本主義的生産に先行する諸形態」大月書店、8頁
- (50) 前掲書、37頁
- (51) 前掲書、9頁～10頁参照
- (52) 前掲書、40頁